

コント番組における女性の仕事に関する描写 —1970年代から90年代を中心に— Representation of Women's Work in Japanese TV Conte Programs : Focusing on 1970s - 1990s

◎石田 万実
Mami ISHIDA

同志社大学大学院社会学研究科メディア学専攻 Doshisha University, Graduate School of Social Studies

要旨…本研究は、日本のお笑い番組において女性がどのように表現されてきたのか、コント番組の女性の登場人物の仕事に注目し、演じられる職業や描写の特徴とその変遷を明らかにすることを目的とする。このため、『8時だよ！全員集合』（TBS 1969-85）、『オレたちひょうきん族』（フジテレビ 1981-89）、『ダウンタウンのごっつええ感じ』（フジテレビ 1991-97）のDVDを研究対象とし、内容分析を行った。分析の結果、『全員集合』では女性の仕事と「女らしさ」を結び付ける傾向があり、生み出される笑いも「女らしさ」を利用したものであった。『ひょうきん族』の女装による登場人物は仕事の様子が積極的に描かれていないが、女性が演じる登場人物の多くは仕事に取り組む姿が描かれていた。しかし、「女らしくない」職業の登場人物は勤勉だと判断される外見、「男らしい」口調、紅一点のいずれかに限定されていた。『ごっつええ感じ』では、女装でも「女らしい」職業と「女らしくない」職業ともに仕事の様子を描き、「女らしさ」を利用しない笑いも起こすようになった。女性が演じる「女らしくない」職業の人物は紅一点であった。このように、「女らしさ」を強調していたコント番組における女性の仕事に関する描写や笑いの起こし方は、時代が進むにつれて、多様であるとはいえないが幅広くなってきていた。

キーワード バラエティ番組, コント, 笑い, ジェンダー, 女装

1. はじめに

日本ではテレビ放送開始以来、絶えずお笑いの要素が含まれた番組が放送されてきた。コント番組もそのひとつである。しかし、コント番組の登場人物に焦点を置いた研究はいまだ少ない。コント番組はどのような人物を描いてきたのであろうか。

太田省一（2007）によると、テレビのコントは一つのメッセージをもった作品であり、演出家の権限が必然的に強いものとなる。友宗由美子ほか（2001）によると、バラエティ番組はおもしろさを追究する、わかりやすく作るという意味では、日常感覚や視聴様態に寄り添っており、理屈なしに瞬間的に理解可能なものが多く、見ているうちに「お約束事」がわかってくるような作りになっている。国広陽子（2012）は、人びとに共有され得ているジェンダーに関する常識に依存して制作されるとともに、新たな現実を作り出す力を持つバラエティ番組を、ジェンダーの視点で研究することは、文化装置としてのテレビの役割を考えるうえで重要であると述べている。

お笑い芸人は圧倒的に男性が多く、男性がユーモアを作り、女性が笑うという構図ができている（大島 2006）。このため、お笑いでは女装によって男性が異性を演じる様子がしばしば見られる。国広（2004）によると、娯楽番組では、ステレオタイプ化したイメージを利用して面白さを演出し、説明を省略するために、男性が女装して「女らしさ」、「母親らしさ」などのステレオタイプを演じることで笑いをとる演出がある。また、澁谷知美（2005: 184）は、お笑いライブでは女性芸人と女性客が冷遇されており、「常識を相対化するはずのお笑いが、ジェンダーにまつわる局面では唯々諾々と男尊女卑ベースの『常識』に従ってしまう」と述べている。

以上を踏まえて、本研究はコント番組で描かれる女装を含む女性の登場人物の仕事に注目し、演じられる職業や描写の特徴とその変遷を明らかにすることを目的とする。

2. 研究対象と研究方法

(1) 研究対象

本研究は、午後8時代に5年以上の継続した放送期間があり、DVD資料が豊富である『8時だよ！全員集合』（TBS 1969-1985、以下『全員集合』）、『オレたちひょうきん族』（フジテレビ 1981-1989、以下『ひょうきん族』）、『ダウンタウンのごっつええ感じ』（フジテレビ 1991-1997、以下『ごっつ』）の2013年までに発売されたDVD本編に収録された現代を舞台とするコントを研究対象とする。

(2) 研究方法

まず、研究対象すべての登場人物を性別、演者、職業、異性装の有無、登場場面などの項目を作成し、表にまとめる。次に、有職の女性が演じる女性登場人物と女装による登場人物が出てくるコントを対象に、台詞や動作、衣装、笑いが起こる場面などを記録し、分析、考察する。最後にそれぞれの番組の結果を比較し、時代による変化を明らかにする。

3. 『全員集合』

(1) 職業

『全員集合』のコント102作のうち有職の女性が描かれている作品は、女性が演じる登場人物が10作、女装で演じられる登場人物が6作であった。女性登場人物の職業と人数、放送当時の職業における女性比率の平均と登場人物数は図1のとおりである。女性比率の低い職業は女性が演じ、女性比率の高い職業は女装でも演じられていることがわかる¹。男性登場人物と比べると、番組全体の女性登場人物数が少ないことも影響しているが、演じられる職種は少ない。

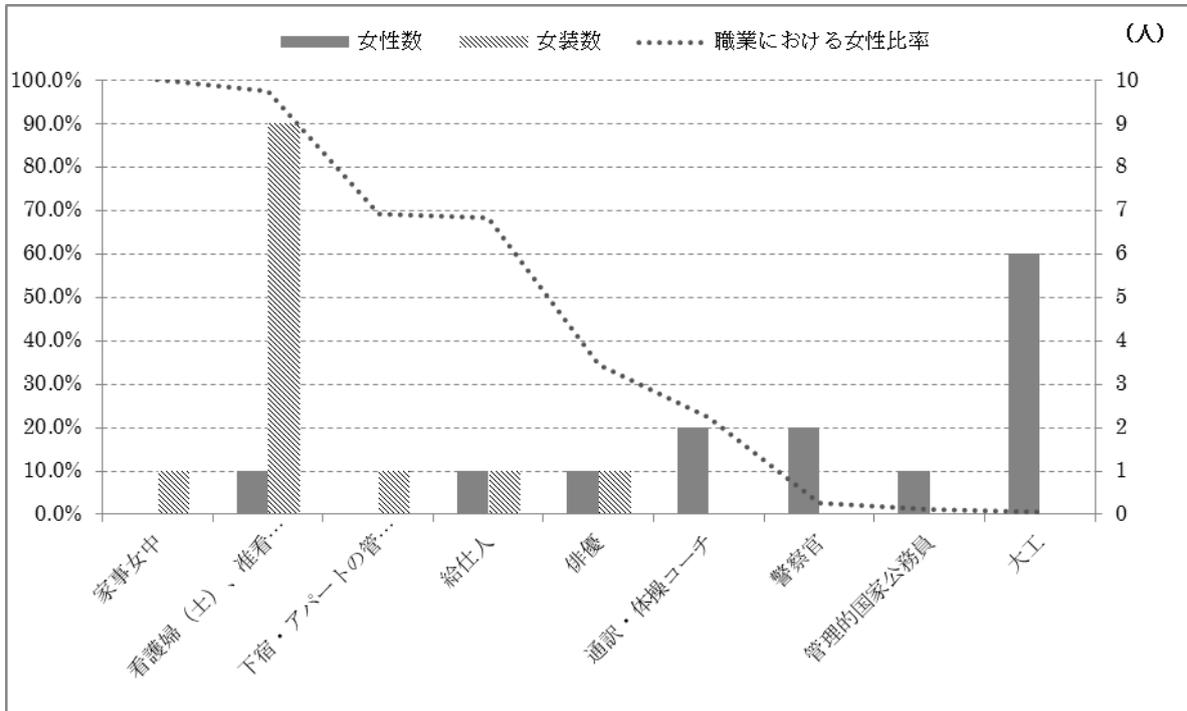


図1 『全員集合』女性登場人物の職業と女性比率²

(2) 仕事の描写

女装で演じられる登場人物にはコントの中心人物が多かった。台詞で「女らしさ」を強調するものが見られた一方で、女性比率の高い「女らしい」職業の登場人物が職務を遂行しようとする姿が過剰に描かれること、暴れることによって笑いを起こす場面も確認できた。女性が演じる女性登場人物はコントの端役であるものが多かった。特に、職業における女性比率の高い看護婦や給仕人、そして「女性向き」の運動を指導する体操コーチは、コントの笑いや内容には直接関わっていなかった。女性比率の低い警察官は、少ない出番のなかで男性登場人物により水をかけられる、顔を汚れたぞうきんで拭かれるといった被害を受けることで笑いを起こしていた。男性に意見するのはパンツスーツ姿の白人の登場人物のみであった。以上より、『全員集合』では女性の仕事と「女らしさ」を結び付けていると考えられる³。

4. 『ひょうきん族』

(1)職業

『ひょうきん族』のコント75作⁴のうち有職の女性が描かれている作品は、女性が演じる登場人物が54作、女装で演じられる登場人物が9作であった。女性登場人物の職業と人数⁵、放送当時の職業における女性比率の平均は図2のとおりである。このほか、女性が演じるアルバイトの学生が2人、職業不明者が1人いた。女装で演じられる職種に比べ、女性が演じる職種が多いことが分かる。女装で複数回演じられる職業は、女性比率の高い芸者、接客社交係（ホステス）、給仕従事者であった。女性によって複数回演じられる職業は、女性比率の高い「女らしい」職業と芸能関係の職業が多い。

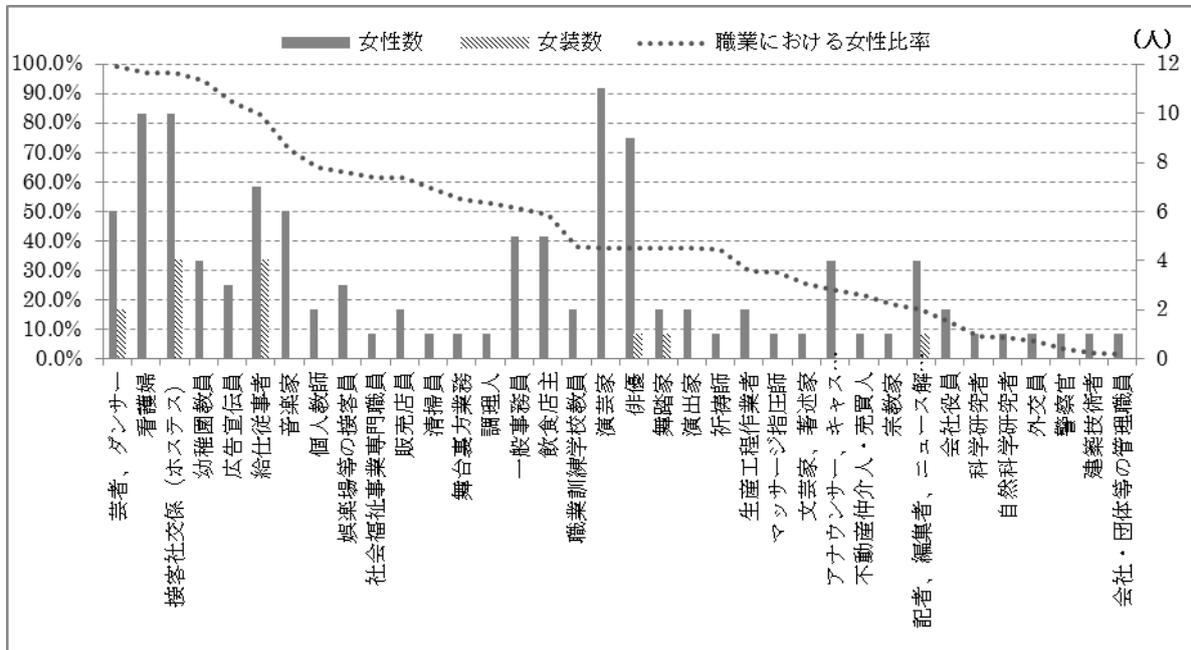


図2 『ひょうきん族』女性登場人物の職業と女性比率⁶

(2)仕事の描写

・女装で演じられる登場人物

明石家さんまが演じた給仕従事者を除き、すべてがコントの1シーンだけの登場であった。なかでも、女性比率の高い芸者と給仕従事者の多くは、番組の人気キャラクターや定番ギャグを披露するためにその場面に相応しい職業を付与させて登場させたもので、女性が仕事をする様子を描いているとはいえなかった。美しい容姿が期待される接客社交係（ホステス）と芸能関係の職業は、仕事人取り組む姿ではなく、その醜さを笑いにしたものであった。女性比率の低いニュース解説者は片岡鶴太郎が演じた外国人女性であった。情報番組で日本の男性についての意見を求められるが、途中で速報が入り話が遮られる様子を笑いにしていた。唯一の主要登場人物である給仕従事者の老人は、接客の様子がコントのメインではないものの描かれている。以上のように、『ひょうきん族』では、女装による有職の登場人物が仕事をする様子は積極的に描かれていないといえる。

・女性が演じる女性登場人物

女性が演じる女性登場人物の約半数が1シーンもしくは2シーンのみの登場で、セリフはなしか一言のみであった。そのほとんどは仕事をしている様子が描かれているが、コントのストーリーや笑いには直接関係しない、背景の一部としての登場であった。これに当てはまるものの多くは女性比率の高い職業を複数名のエキストラが演じるものと、芸能関係の職業の登場人物であった。その一方で、コントの中心人物として活躍する有職の女性登場人物もいる。その特徴を見ると、①仕事の描写がない、もしくはコントの一部のみの描写でプライベートがメインに描かれているもの、②仕事の描写が多いが、男性のアシスタントとして描かれているもの、③仕事の描写の中で恋愛が描かれるもの、④その他に分けられる。②に当てはまるのは2人で、どちらも放送業界を描いたコントでの番組のアシスタントであった。③の恋愛描写はコントの端役の登場人物でも確認でき、いずれも仕事関係者との恋愛が描かれていた。また、端役には女性が性的に扱う描写（セクハラやトイレの場面、露出の多い衣装など）も見られた。この描写は女性比率の高い職業（看護婦、給仕従事者、接客社交係、娯楽場の接客員）と俳優で確認できた。

女性比率が30%以下の「女らしくない」職業の人物も演じられているが、その描写にはいくつかの傾向が見られた。①仕事

の描写がないもの、②職場の紅一点として登場するもの、③眼鏡やサングラスをかけている、低い声、厳しめの口調といった特徴があるもの、④以上には当てはまらず、仕事の描写があるものである。①には休憩中やプライベートの様子を描いているもののほか、仕事に関する理由で誘拐監禁される登場人物もいた。この描写は一般事務員でも見られた。②に当てはまる記者は、記者会見場などで大勢いる男性が質問をする横で、マイクを向けるだけ、あるいは座っているだけという描写であった。なお、職場での紅一点は職業比率が 50.9%で男女がほぼ同数の一般事務員でも確認できた。③は会社役員や管理職員で見られた。女性比率は低くないが、幼稚園教諭や職業訓練学校の教官、料亭の店主、テレビキャスター、通訳といった人に何かを教える、指示する、伝える職業の登場人物でもこの特徴は確認できた。斎藤耕二（1978）によると、眼鏡をかけることにより、かけていない場合より勤勉、知能が高い、理性的、厳しい、責任感があるなどと判断される。また、塚脇ほか（2010）によると、サングラスの着用は活動的な印象を与える。低い声や厳しめの口調は「男らしさ」を表現していると考えられる。④に当てはまるのは、駐車違反を取り締まる警察官である。従来、交通部門には女性警察官の多くが配置されていた（警察庁長官官房人事課2012）。つまりここでは、「女らしくない」職業のなかの「女らしい」仕事を描かれていた。

女性が演じる有職の登場人物が起こす笑いには、女性を性的に扱うことによる笑い、小道具を使用した突発的な笑い、仕事以外のシーンにおける笑いといった仕事内容に関係のないものが多いが、仕事の描写で笑わせるものもいくつか見られた。その多くが演出家の要望に応える俳優、仕事の内容を何度も確認する部長、奇怪な動きの祈祷師など、与えられた仕事をこなす姿を笑いにしたものであった。他には、チップを払おうとした客の財布を受け取る給仕従事者、大声で話す奔放な芸者といった「女らしい」職業の、期待されるものとは異なる行動を笑いにしたものがあつた。

まとめると、コントの主要人物である女性が演じる有職の登場人物は仕事の描写が控えめであったり、仕事と恋愛を結び付けるものが多かったが、端役のほとんどは仕事の様子が描かれていた。その多くはセリフが少ないが、仕事に取り組む様子が描かれた女性比率の高い職業の登場人物であった。女性比率の低い職業や人に指示や指導をする職業の女性は、特徴づけによって知能を高く見せる、「男らしく」見せるといった工夫がなされていた。つまり、『ひょうきん族』では仕事の描写があるものは「女らしい」職業である傾向があるが、「女らしさ」を利用した仕事描写における笑いは少ない。また、紅一点、特徴ある容姿や口調という限定された範囲で「女らしくない」仕事をする女性の姿を描いているといえる。

5. 『ごっつええ感じ』

(1) 職業

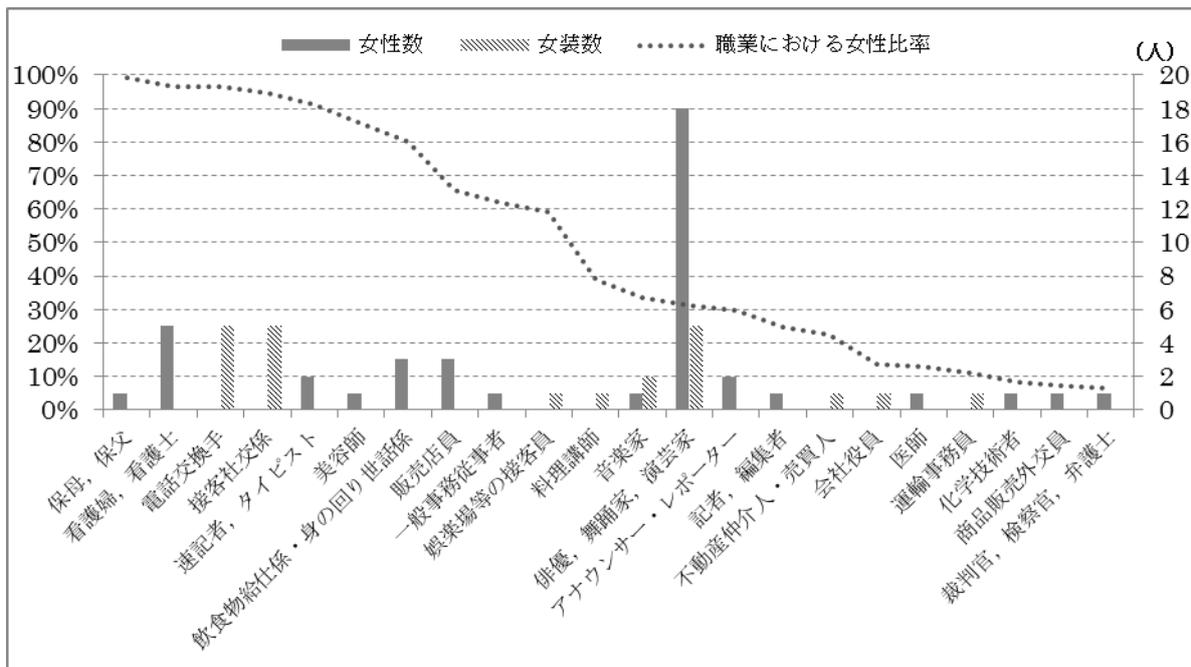


図3 『ごっつええ感じ』女性登場人物の職業と女性比率⁷

『ごっつええ感じ』のコント 123 作⁸のうち有職の女性が描かれている作品は、女性が演じる登場人物が 33 作、女装で演じられる登場人物が 14 作であった。女性登場人物の職業と人数、放送当時の職業における女性比率と登場人物数は図 3 のとおりで

ある。なお、図3には含まれていないが、3人の性風俗店勤務、2人の職業不明のパートタイマーの女装で演じられる登場人物、6人の職業不明の女性が演じる女性登場人物がいる。芸能関係の職種を除き、女装で演じられる登場人物と女性が演じる女性登場人物の職種は重なっていない。女装で演じられる職業で複数演じられるのは、女性比率の高い電話交換手、接客社交係と風俗店勤務、芸能関係の職業であった。女性が演じる女性登場人物で複数回演じられるのも同じく女性比率の高い看護婦、飲食物給仕係、速記者と芸能関係の職業であった。

(2) 仕事の描写

・女装で演じられる登場人物

女装で演じられる登場人物のほとんどが、仕事に関する描写で笑いを起こすものであった。その内容を見ると、①仕事中の非常識的な行動、奇抜さを描いたもの、②意外な内容の仕事で笑いにしたものの、③美しさを期待される職業で醜さを笑いにしたものの、④その他であった。①に当てはまるのは、演芸家、料理講師、娯楽場等の接客員、運輸事務員の、女性比率が5割未満の職業であった。芸能関係の職業である演芸家と、「女性のものっていう感じが」⁹ある料理を専門とする講師は、仕事をこなそうとする過程で笑いを起こし、娯楽場等の接客員と運輸事務員はやる気のない様子を笑いにしていた。②は女性比率の高いパートの電話交換手と女性比率の低い不動産仲介人で、勤務初日の新人パートを除き、仕事を忠実にこなす姿が描かれていた。③は性風俗店勤務と舞踏家（ストリッパー）、女優で、前者2つは客が期待を裏切られる様子を笑いにしていた。④のその他には、仕事をするホステスの美しさと母子家庭であるプライベート、手紙や電話で泣く姿のギャップを描いたものがあった。また、女性比率の低い会社役員が未知のものとの出会い戸惑う姿を笑いにするものの、それを仕事に活かす様子が描かれていた。仕事の描写がないものを見ると、コントに子供が登場するパートタイマー、結婚を機にグループを解散する音楽家と結婚式を行う場面がある性風俗店勤務、休憩中の外国人舞踏家であった。舞踏家を除き、家庭を持つもしくは結婚を控えた女性であった。特にパートタイマーはどちらもコントの主要人物であるが、仕事内容に関する言及はなかった。

まとめると、『ごっつええ感じ』では女装で「女らしい」職業、「女らしくない」職業のどちらも演じられており、多くが仕事中の描写で笑いを起こしていることがわかった。笑いも「女らしさ」を利用したものばかりではなかった。「女らしくない」職業を否定的に描いていないものもあった。しかし、仕事の描写がないものは1人を除き家庭を持つ（予定がある）ものであり、女性と家庭を結びつける傾向も見える。また、性的なサービスを提供する職業の登場人物が多いという特徴があった。

・女性が演じる女性登場人物

有職の女性が演じる女性登場人物のうち、仕事中の描写で笑いを起こしているものには、①意外な仕事内容で笑わせるもの（俳優、レポーター、科学技術者）、②仕事関係者とのやりとりを笑いにしたもの（アナウンサー、記者、医師、販売店員、演出家、販売外交員）があった。①はどちらも女装と同じく、仕事をこなす姿が描かれていた。②は、アナウンサーと記者は仕事関係者からの暴力にとまどう姿、医師と販売店員、演出家、販売外交員はセクハラ発言や行為に対応する姿を笑いにしていた。仕事中の描写で笑いを起こす登場人物には、女性比率が70%を超える「女らしい」職業のものはいなかった。また、「女らしくない」職業の科学技術者、医師、販売外交員は職場での紅一点であった。

笑いを起こさないが仕事の描写がある登場人物には、セリフがないか一言のみのものが多い。女性比率の高い看護婦、速記者、保母、美容師、飲食物給仕係と、芸能関係の職業である演芸家と演出家、女性比率の低い検察官、職業不明者が当てはまる。いずれも仕事をしている場面を描いているが、女性比率の低い検察官は紅一点として登場し、職業不明者はそれぞれお茶出し、伝言、男性の付き添いと補助的な仕事をしていた。セリフのある登場人物は女性比率の高い職業と芸能関係の職業、お茶出しなどの補助的な業務を担当する一般事務従事者であった。このうち身の回り世話係（CA）のみ、男性上司を注意する場面があった。仕事の描写がないものは、休憩中の演芸家と実家で結婚報告をする職業不明者、職場における恋愛相談をする職業不明者であった。また、仕事の描写はあるものの、妊娠報告をした後に恋人に殺害される演芸家もいた。

まとめると、仕事の描写で笑いを起こす登場人物に「女らしい」職業はなく、女装には見られないセクハラを笑いにしたものがあった。仕事の描写があるが笑いを起こさない登場人物には「女らしい」職業に就くものが多く、なかには男性上司に意見する登場人物がいた。「女らしくない」職業の人物は1人を除き、紅一点であるという特徴が見られた。

6. まとめ

分析の結果、いずれの番組も女装で多く演じられるのは「女らしい」職業であることがわかった。また、女性が演じる端役も「女らしい」職業の人物が多かった。しかし、女性の仕事に関する描写には変化が見えた。『全員集合』では女装、女性にかかわらず、女性の仕事と「女らしさ」を結び付ける傾向があった。生み出される笑いも「女らしさ」を利用したものであ

た。『ひょうきん族』の女装による登場人物は仕事の様子が積極的に描かれていないが、女性が演じる登場人物の多くは仕事に取り組む姿が描かれていた。しかし、「女らしくない」職業の登場人物は勤勉だと判断される外見、「男らしい」口調、紅一点のいずれかに限定されていた。『ごっつええ感じ』では、女装でも「女らしい」職業と「女らしくない」職業ともに仕事の様子を描き、「女らしさ」を利用しない笑いも起こすようになった。職場の男性に意見する女性は、『全員集合』ではパンツスーツ姿の白人女性であったが、『ひょうきん族』では勤勉で「男らしい」口調の「女らしくない」職業の女性となり、『ごっつええ感じ』では「女らしい」職業の女性になった。「女らしくない」職業の女性は、『全員集合』では少ない出番の中、被害を受けていたが、『ひょうきん族』では紅一点が特定の外見と口調、『ごっつええ感じ』では紅一点に限定されるものの仕事をこなす姿が描かれた。このように、「女らしさ」を強調していたコント番組における女性の仕事に関する描写や笑いの起こし方は、時代が進むにつれて、多様であるとはいえないが幅広くなってきているといえる。

補注

- ¹ ドリフターズのコント番組の分析結果（石田 2014）と同様である。
- ² 職業における女性比率は、総務省「国勢調査」の1970年から1985年のデータを平均したものである。通訳と体操コーチは「他に分類されない専門的職業従事者」を参照した。
- ³ この結果も、ドリフターズのコント番組の分析結果（石田 2014）の一部と同様である。ただし、『全員集合』より後に放送された『ドリフ大爆笑』には有職の母が登場する。
- ⁴ 複数のDVDに重複して収録されている作品は収録時間の長いもののみ分析対象とした。
- ⁵ ひとつの場面で複数のエキストラによって演じられる職業はまとめて1人とカウントした。
- ⁶ 職業における女性比率は、総務省「国勢調査」の1980年と1985年のデータを平均したものである。舞台裏方業は「他に分類されない労務作業者」、職業訓練学校教員は「その他の教員」、祈祷師は「その他の個人サービス職業従事者」、アナウンサー、通訳、キャスターは「他に分類されない専門的・技術的職業従事者」を参照し、職業小分類が判別できないものは中分類、中分類を判別できないものは大分類のデータを参照した。
- ⁷ 職業における女性比率は、総務省「国勢調査」の1990年と1995年のデータを平均したものである。料理講師は「その他の教員」、アナウンサー、レポーターは「他に分類されない専門的・技術的職業従事者」を参照した。
- ⁸ シリーズ化しているコントは、シリーズ全ての作品をまとめて1作とした。
- ⁹ 『THE VERY 3 BEST OF ダウンタウンのごっつええ感じ #3』Disc1「渋谷系裏料理（キャシイ塚本）」再生時間01:57

参考文献

- 石田万実（2014）「笑いの中の女性表象——ザ・ドリフターズのコントを事例に」『笑い学研究』21: 32-44.
- 大島希巳江（2006）『日本の笑いと世界のユーモア——異文化コミュニケーションの観点から』世界思想社
- 太田省一（2007）「開拓者の時代——七〇年代バラエティというフロンティア」, 長谷川正人・太田省一編『テレビだよ！全員集合——自作自演の1970年代』青弓社, 28-54.
- 国広陽子（2004）「番組にみるジェンダー・ステレオタイプ」, 萩原滋・国広陽子, 『テレビと外国人イメージ——メディア・ステレオタイプینگ研究』勁草書房, 82-101.
- （2012）「テレビの娯楽の変遷と女性——テレビドラマを中心に」, 国広陽子編『メディアとジェンダー』勁草書房, 65-107.
- 警察庁長官官房人事課（2012）「女性警察官の採用・登用の拡大について」, 内閣府『共同参画』50: 13.
- 斎藤耕二（1978）「パーソナリティ判断の実験的研究——メガネ着用効果の検討を中心に」, 『実験社会心理学研究』17（2）: 121-7.
- 澁谷知美（2005）「女子とお笑い」『ユリイカ』37（12）: 178-84.
- 塚脇涼太・新入智哉・平川真・深田博己・樋口匡貴（2010）「メガネ着用が対人印象に及ぼす影響」『広島大学心理学研究』10: 321-7.
- 友宗由美子・原由美子・重森万紀（2001）「日常感覚に寄り添うバラエティ番組——番組内容分析による一考察」, 『放送研究と調査』51（3）: 12-41.